

39

東洋史学者・市村瓚次郎宛ての医学者たちの書簡

町 泉寿郎

二松学舎大学

【東洋史学者市村瓚次郎とその来簡】

市村瓚次郎(元治元8.9-昭22.2.23 <1864.9.9-1947.2.23>), 字奎卿, 別号器堂・筑波山人・月波散人)は常陸国筑波郡北条町(現つくば市北部)に生まれ, 上京して東京大学文学部古典講習科漢書課前期(明治16年9月設置, 但し市村は同17年追加募集時に入学)に学び, 明治20年7月9日に同課を首席卒業。学習院の教授を経て, 同31年より東京帝国大学文科大学助教授, 同38年に教授に昇任し, 同40年に文学博士を授与され, 大正14年3月に62歳で定年退官するまで27年に亘って東京帝国大学において東洋史学を講じた。また漢学者としても知られ, 漢詩・訳詩を創作し, 明治天皇皇女への漢籍講義, 宮中講書始の進講(1925年)や明仁親王(現上皇)降誕時の読書鳴弦の儀奉仕など, 皇室の信頼が厚かった。

近年, 市村が自ら取捨選択し装丁した来簡340通余が市場に現れ, 二松学舎大学日本漢学研究センターの所有となった。その中には市村が交流をもった医学者たちの来簡も含まれるので, その概要を紹介する。

【森林太郎書簡2通: No 9-1888.12.21, No 14-1889.8.22】

書簡(No 14)の内容は, 文学評論雑誌『しがらみ草紙』の発刊に関する意見交換。市村は『文学評論』のタイトルを主張したが, 創刊号の論文は森の演劇論だけであったため, 落合直文の意見に従い『しがらみ草紙』に落ち着いたらしい。

【賀古鶴所書簡4通: No 15-1889.9.20, No 30-1892.10.21, No 195-1917.2.23, No 196-1917.5.23】

書簡(No 15)の内容は, 青山胤通が『しがらみ草紙』の購読を楽しみにしていること, 森林太郎宅に遊びに行き, 市村の病状を案じていること。書簡(No 30)は, 清国調査のために出張した市村が北京で病臥したため, それを見舞う書簡。書簡(No 195)は, 明末の政治家史可法の絶筆の拓本を入手した賀古がこれに寄せる題詩を諸氏に求めた書簡。書簡(No 196)は, 上総夷隅郡長者町に森林太郎とともに構えた別荘の命名(森は鷗荘, 賀古は鶴荘)に関する内容。

【井上通泰書簡9通: No 35-1893.3.20, No 39-1893.6.25, No 44-1896.2.26, No 53-1897.5.29, No 108-1908.7.26, No 109-1908.7.26, No 136-1911.2.11, No 137-1911.3.14, No 187-1916.2.12】

井上通泰は市村が最も親交を持った医学者。民俗学者柳田国男はその実弟にあたる。井上は岡山の第三高等学校医学部の眼科教授を勤めた後, 帰京して眼科開業の傍ら短歌創作や国文学研究に励み, 山縣有朋ら政治家と交流を持ち, 皇室の信頼が厚かった。井上と市村の交流は森林太郎らとの文学結社「新声社」の時代に遡るが, 書簡(No 108, No 109)からは, 明治天皇皇女(富美宮允子内親王・泰宮聡子内親王)に市村が漢籍を講義するようになったのが井上の仲介によるものであったことが分かる。書簡(No 137)は, 南北朝正閏問題に関する政府方針を市村に報じた内容で, 井上は歴史教科書や史料の表現における注意点を書き送っている。

【呉秀三書簡1通: No 123-1909.9.11】

吉益東洞・南涯の書幅を捜している呉に対して, 市村が郷里に照会して, 東洞・南涯の書幅は見つからなかったが, 南涯と岑少翁の合作書幅が見つかったことを報じたのに対する返書。

【富士川游書簡1通: No 131-1910.7.29】

唐・柳宗元の「捕蛇者説」中に書かれている「大風」と「瘕癘」に関して, 市村から富士川にその病名の同定に関する質問があり, それに対する回答。「大風」は「今日之癩病」であること, 「瘕癘」は不明なのであらためて本草書を検索してみることを回答し, 『素問』『諸病源候論』から「大風」の用例を挙げている。

【入澤達吉書簡2通: No 168-1914.11.15, No 171-1915.1.22】

書簡(No 168)は, 日露戦争時に戦死した戦艦初瀬の副長有森元吉中佐の遺品として, 有森の遺族から入澤に贈られた植木鉢一対について, 入澤がその由来を漢文で記して市村に添削を求めた時の書簡。当該品は日清戦争時に威海衛の劉公島陥落の際に丁汝昌提督の居室から戦利品として持ち帰ったものであった。